

## 「書くこと」の指導

吉田晴世

(大阪教育大学)

## 1. 「書くこと」の実態

インターネット、携帯電話、TVなど、日常生活においてさまざまな情報が映像でわかりやすく手に入るようになってきました。逆に、そういう時代だからこそ、自分で考えて文章を読み書きするという力が必要になっているのですが、現実はなかなか厳しく、こと英語となると日本語にはない数々の困難が立ちはだかります。

ちなみに、平成18年度大阪府の学力実態調査(中学3年生の5月時点)の結果によると、英語は「聞くこと」「読むこと」に比べ、「書くこと」に課題があることがわかりました。一例をあげると、次の設問においては、正答率が35.6%、誤答率が22.4%、無答率が42.0%でした。

自分の夢について、まとまった内容の文章を4文以上で書きなさい。ただし、最初の文はMy dream is に続けて書き始めなさい。

(My dream is... は1文に含みます)

これは、テーマだけ与えられた自由記述の内容非制限問題と呼ばれる問題で、生徒は自分の考えを表現するために、自分自身でことばを選び構造を決めて書かなければなりません。ここで問題となるのは、得点の低さもさることながら、無答の割合の高さです。4割強もの生徒が何も書けていないのです。

## 1.1 「書けない」原因

生徒たちが英語で書けない原因は、いったいどこにあるのでしょうか。

まず、「国語力」があげられます。頭の中でわかっている、表現できなければ、解答として人に伝達することができません。現代の中学生が、最も苦手としている部分が、この「表現(記述)能力」では

ないでしょうか。同上の国語のテストにおいても、「読むこと」の無答率が5%であったのに対し、「書くこと」の無答率は17%と高く、母語においてさえも、表現する力に問題があることがわかります。

次に、生徒の英語力の二極化が、中学1年生の1学期に始まっていることにあります。この時期では、英語の基本文型を理解していなければならないのですが、否定文や疑問文でさえ習得しきれない状況が生まれ、なんの手当てもしないうちにいつのまにか英語がわからなくなっていた、という中学生が驚くほど多くいるのです。作文しようにも単語の並べ方がわからないのです。実際に、前述の英語のテストにおいて、英語の総得点と無答率との相関が高く、得点の低い生徒ほど無解答であることがわかりました。

英語の力の弱い生徒が、「書くこと」において力を発揮できないのはうなづけますが、英語を比較的得意とする生徒であっても、「書くこと」は決して得意であるとはいえません。前述のテストの正答率が3割5分程度であったことから、このことは明らかです。「書くこと」におけるコミュニケーション能力が、自己紹介や趣味や興味など、自分自身に関することを自由に書く段階にとどまっており、物事や他人のことにに関する情報について、その内容を正しく把握し、要点を簡潔に表現するまでには至っていないのが現状です。

## 1.2 「書くこと」を十分に指導できない原因

では、「書けない」という問題は、生徒側にだけあるのでしょうか。

現行の学習指導要領に基づくと、週3時間という枠組みの中で教科書をこなしていかなければならないカリキュラムにも問題があります。「書くこと」の指

導のためには、必ずそれを採点し評価していくという手間が必要となります。日本語で与えられた単文を、それに適した英語の構文に置き換えて英文にする、というものであれば、採点もある程度自動化することができます。でも、これでは英文法を覚える手段、あるいは英語の慣用的な文型を覚える手段としての「書くこと」の指導になってしまいます。つまり、「書くこと」の指導という名目のもとで実は文法や文型を教えているということになるのです。

自由作文という意味での「書くこと」の指導は、機械的にすませることはできず、語学力は当然のことながら、論理的に文章を組み立てていく力を育成していくことが必要とされます。このような指導を週3時間の中で行うことは、はなから無理なことなのですが、なにもせずに放っておき、「書くこと」の指導は無視してよいかということもいきません。

以下では、「書くこと」のどういうところが困難であり、それを克服するにはどのような指導が効果的であるかについて考えていきます。

## 2. 「書くこと」の難しさ

4技能の中では、書く能力を身につけることが最も難しいのではないのでしょうか。話す方が大変だと思われる人もいるでしょうが、話すときは何度でも言い直しができるという利点があります。また、こちらの言わんとすることを相手が察してくれる場合も多々あります。身振り手振りで音声以外の手段を使って意思を伝達することも可能です。

「書くこと」と「話すこと」の一番大きな違いは、その場に相手がいるかいないかです。相手がいるということは、すなわちその場でのコミュニケーション活動が確保されていることを意味します。しかし、「書くこと」ではこういった手段が使えません。できあがるまでにじっくりと考える時間があるぶん、相手もじっくりと読む時間が与えられていますが、書かれた文字だけで表情やプロソディが加わらないため、そのぶん間違いが見つかりやすくなります。相手にわかるように、かつ説得力のある書き方ができるまでには相当の時間がかかることになります。

中学校での「書くこと」の到達目標をそこまで高いレベルに設定する必要はありませんが、「書くこ

と」は、「書き出す」という創造的な要因を有する複雑なものである、ということ considering 指導にあたるべきでしょう。

### 2.1 正書法 (つづり方)

語彙については、つづりの難しさがまずあげられます。これは、英語は発音どおりに文字をつづらないということから生じています。例えば、本稿で取り上げている「書く: write」でさえ、発音とつづりに隔たりがあります。中学の1年生では、アルファベットが書けるようになり、単語も正しいつづりで書けるようになる必要があります。しかし、単語のつづり練習は多くの場合単調な作業になりがちで、その単調さ回避のために、小学校で学習したローマ字の読み方を利用して、「orange はオレンジで、そうすれば間違わない」というローマ字読み信仰のようなものが発生してしまうことがあります。これは、一つのつづりに対して、「話すため」の発音と「書くため」の発音の二種類の発音を存在させることになり、「書くこと」の自動化への妨げの要因になってしまいます。

また、つづりが曖昧だと、作文をする際につづりを正確に覚えていない単語の使用を避け、自分の知っている限られた単語リストの中から選んで文章を書く傾向が多く見受けられます。結果としては、限定された単語を用いて書かれた、自分が意味することを的確に伝えていない、何かよくわけのわからないものを作文してしまうことになるのです。

### 2.2 語順

言語には単語の並べ方に、単語の順番があまり重要でない言語と、単語の並べ方がきっちりと決まっている言語の二種類あります。

英語は単語を「並べて」文を作ります。どの単語がどの位置に納まるかによって、意味が決定されます。例えば、“Karl hit Mark with a champagne bottle.” の場合は、Karl が「行為者」で、Mark が「被行為者」で、champagne bottle が「手段」であることがその位置で決まるのです。ところが日本語では、「カールはシャンペンボトルでマークを殴った」でも「カールはマークをシャンペンボトルで殴った」でも「シャンペンボトルでカールはマークを殴った」でも「マークをシャンペンボトルでカールは殴った」

でも構わないのです。

つまり、英語は語順に大きく依存する言語で、語順が命であるといっても過言ではありません。語順に縛られない日本語を話す私たちには、この語順のルールが英語を学ぶうえで大きな壁になっています。

## 2.3 日本語と英語の思考体系の違い

表現力については、日本語で考え、それを翻訳しようとしてしまうことが、より「書くこと」を難しくさせています。書こうとすることを、先に常に日本語で組み立ててしまうのは、英文を読む際にいつもすべて和訳し理解させてきた弊害だと考えられます。日本語の思考体系が確立している中学生が、英文の内容をまず日本語で考えるのはきわめて自然なプロセスですから、英文を日本語訳することへの反論はありません。しかも、英文が抽象的な内容になればなるほど、日本語でまず意味を捉えて、自分の持っている知識と照らし合わせながらその内容を把握しなければ、理解することは困難でしょう。

日本語と英語では思考体系が異なる部分があり、その相違は言語表現にも表れ、そのことが「書くこと」に影響を与えます。書こうとするとときに頭の中で英語を組み立てるという過程をふまず、和文英訳のみで終わってしまうことが習慣となってしまうのです。

## 3. 「書くこと」の指導はどうすればよいか

### 3.1 文脈の中で語彙を習得させる

どうすれば、効果的に語彙数を増やすことができるのでしょうか。

単語を覚えようとするとき、単純に各単語を単語帳や単語カードに抜き出し10回ずつ書かせたりするのは、言語習得の見地からはそれほど有効の方法だとはいえません。単語カードを用いるような方法は、対連合学習法といって、「春—spring」や「机—desk」の日本語対英語のように、刺激と反応を対にした二つの項目を覚えさせることですが、機械的で心理的負担も軽くないという欠点があります。短時間の保持ならば、このような学習によって、限定された語彙を記憶することは可能ですが、そのことによって学習された単語は容易に忘却されてしまいます。

語彙はそのものだけを抜き出して学習するのではなく、英文の中で学習するのが有効でしょう。例えば、take, have, getのような多くの意味や用法を持つ動詞や、dearのような感嘆詞、前置詞などは、やはり文脈の中で覚えていくのがよく、その方が使用されている状況と結びつけているために印象に残りやすく、長期的記憶に残ります。

単語に限らず、成句表現なども文脈とともに理解し、声に出して発音させるのが効果的でしょう。

### 3.2 コミュニケーションのために「書くこと」を教える

書くという作業の多くは、人に何かを伝えるために行われます。つまり、コミュニケーションとしての「書くこと」であることを忘れてはいけません。他人を視野においた「書くこと」の最も簡単なものは、伝言などを書くときのメモやメッセージでしょう。大事な情報のみを書き留めるもので、文章の形をとらなくてもすまされます。授業の中では、「聞くこと」の指導と組み合わせて行うことができます。

次に、家族や友人など、親しい人を書く手紙があります。この場合は書き方や形式にあまりこだわる必要がなく、お互いの人間関係が確立しているので思いつくままに表現してもコミュニケーションは成立します。授業では、相手を意識した日記という形で習慣づけさせることができます。

なぜ文章を書くのかということを生徒にはっきり示すことが重要なのです。読んだことや話し合ったことに対して自分の意見を書こうという意欲をもったときに力がつくのではないのでしょうか。ディベートなどで生徒の問題意識を掘り起こすことは、英語は手段だという体験にもなり、「書くこと」への動機づけに結びつき有効です。教員は生徒に文章を書かせるように仕向ける指導法を身につける必要があるでしょう。対象が自分であっても相手であってもコミュニケーションを意識した「書くこと」に気づかせ、導いていくことが重要でしょう。

### 3.3 段階的に表現する力をつける

文章を書く力は、数ある勉強の中で、いちばん伸びるのに時間がかかるものだとされています。それは、まず書く習慣そのものが日常生活の中で身につけにくいものだからです。友だちに書く手紙や日記のようなものは自由に書いても、自分の意見を論

理的に説明するような文章を書く機会、日常生活の中ではなかなかありません。英語の授業でも、文を書かせることはしますが、まとまったものを伝えようとする文章レベルの訓練が不足しています。

自由作文のように、生徒が自分の考えを英語で書けるようになるには、段階的な指導が必要になってきます。基礎・基本的な知識を定着させるための書き写しのような活動に始まり、自由作文への橋渡しの役割をする制限作文、そして自己表現のための自由作文へと系統的に進む指導が大切です。そして、授業の中での工夫としては、これまでの「聞くこと」と「話すこと」の音声を重視した指導と平行して、「書くこと」も取り入れた授業展開の工夫が必要です。コミュニケーション能力の基礎を養うためにも、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランスよく取り入れた授業内容の設計が不可欠でしょう。

ここでは、指導法の具体例を紹介します。

第一段階として本文の書き写しがあります。音読の方法の一つに“Read and look up”というものがあります。“Read”という合図とともに生徒は一齐にセンテンスあるいはフレーズを黙視し、“Look up”という合図で、教科書から目を離し、前を見て憶えた英文を音読します。これを書く指導に用います。“Read”の合図で書こうとする英文をある程度のまとまりで読み、“Write”の合図で、憶えた英文を書きます。ただし、最初から文を書かせるのが難しい場合は、単語から始めてもかまいません。書こうとするものを見ないで「書くこと」に慣れさせることが大切なのです。

第二段階として、制限作文があげられます。すでに意味内容を理解し、何度か音読を繰り返した教科書を使い、それぞれの英文の書き出し数語に続く英語を、記憶をたどりながら書き英文を完成させます。英文の完成には、意味内容の理解はもちろんのこと、文法力も必要で、生徒にはかなりの負荷がかかりますが、総合的に表現力を伸ばすことのできる有効な活動です。他の方法として、教科書の一つのパートを使い、順序を入れ換えた英文を話しの意味が通るように並び換えさせ、できあがったものを書かせる活動があります。文法よりも文脈を重視し、まとまった英文を書かせる際に役立つように、文章の内容構

成のしくみを理解させることを意図した活動です。

これらの活動は、「読む」「聞く」「話す」の3技能を使い、理解している意味内容と音声とを統合する発展的な活動です。自己表現能力を育てるためには、段階的な指導とともに、生徒に書くことを習慣づける指導が望まれます。その際、大がかりな活動は必ずしも必要ではなく、本文の書き写しや、制限作文など、普段から教科書を創造的に使うことで、自己表現への基礎的な能力を定着させることができます。

このような、段階的で4技能をフルに用いる活動は、単語と文章の「繰り返し」と「想起」を常に活性化させます。そうすることで、「書くこと」の困難点であった、英語の語順も自然に習得できるようになり、「書くこと」への自動化が期待できます。

### 3.4 書く過程と評価を重要視する

指導上の留意点としては、ただ「書く」という英作の時間とは違い、自分自身を見つめ、自分の気持ちなどを書くまでの過程があることに気づかせることが肝要です。その過程の中で、想像することや発想することが楽しいと感じる生徒が増え、その輪が広がっていくことが、「書くこと」への関心・意欲となっていきます。

評価に関しては、タスクの種類に応じて観点を定め、例えば、つづり、文法、内容、意欲などの観点別に評価点を設定し採点する分析的評価法を取り入れることを薦めます。英文は正しくは書けないものの、作文した内容が理解可能なもので、書こうとする意欲のある生徒には、その部分を評価し、この評価を生徒に還元することで、生徒は自分の力をより正確に判断でき、段階的な評価を知らせることで次の学習への動機づけにもなります。

「書くこと」を取り入れた表現活動および評価の工夫をすることは、積極的に自己を表現しようとする態度を育成します。ここで言う「自己表現力」とは、「自分自身が伝えたいことを、正しく書き表すとともに、相手に伝えることができる」という伝達コミュニケーション能力のことを指します。そのため、生徒の思いや願いを書く機会をもうけ、授業の中で重点化し、自己表現につながる授業の実践を目指していくことが求められるでしょう。